中野竹子は会津藩士中野平内の長女として弘化四年（1847）に江戸で生まれた。父は江戸詰の武士で、竹子は幼少の頃より俊英にて進取の気風に富み、特に書道と薙刀に長じていたといわれている。

慶応四年（1868）激動の会津に帰った竹子は一時、坂下町内の縁者宅に身を寄せ、その後父母と共に若松の城下に移り住む。

同年夏、会津若松の城下はすさまじい戦場と化す。いわゆる戊辰戦争である。八月二十三日、藩主松平容保の義姉照姫警護の任を帯びた竹子は、照姫坂下へ赴くの報を受け母妹とともに家を出た。やがてそれは誤報と判明、竹子たちは再び若松へ引き返すこととなる。

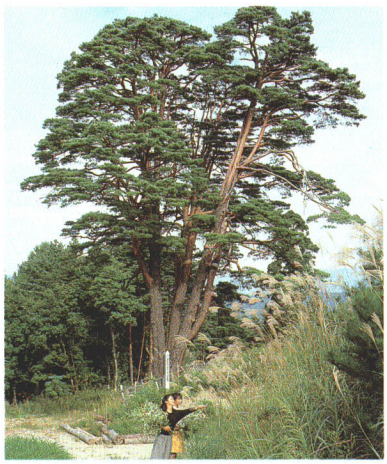
帰路高久の宿に一泊し、明けて二十四日、一行は幕軍の衡鋒隊、坂下の剣道師範渋谷東馬率いる一行らに加わって、その夜、薬師堂河原において布陣していた新政府軍と激しい戦闘が繰り広げられた。奮闘むなしく竹子は銃弾に倒れ、壮絶な戦死をとげた。享年二十二歳。その首級は法界寺に今も眠っている。

戊辰戦争に敗れた会津の城下町には各方面から無頼の徒が入り込み、町人や農民をバクチに誘い、ニセガネを賭けて巧みにニセガネでないものを集めていた。これは西軍側が朝敵となった土地の経済を混乱させる目的でニセガネを持ち込んだともいわれている。

このニセガネの取締りにかこつけて無実のものを捕らえて投獄したり斬首したりして、会津人の恨みを買っていたものに若松県監察方頭取である久保村文四郎がいた。

彼は越前藩士で、西軍についてきて若松県の役人になったものである。

明治六年（1873）頃、任終わって郷里に帰る久保村が片門の宿から籠に乗り、東松峠に向かう途中滝沢橋近くにさしかかると、いきなり藪から二人の武士が抜刀し襲いかかり斬殺してしまった。この二人は旧会津藩士、伴百悦（どうえつ）・高津平蔵で、共に会津坂下町にも居を構えていた高潔の士で、伴は剣の達人、高津は吉田松陰が尋ねるほどの憂国の士でもあったのである。



あの赤穂浪士のひとり、堀部安兵衛は本名を中山安之助といい、寛文十年（1670）会津坂下町内の貴徳寺で生まれている。父親は訳あって勘当の身となり、新潟の新発田から会津坂下の茶屋町に移り住んでいた。

母は五歳の時に病死し、病床にいた父も安之助が十三歳の時、押し込み強盗に斬られて亡くしている。この時、安之助は父の脇差で強盗を刺殺し、見事仇討ちを果たしている。

その後新発田藩の祖父に引きとられ、後に江戸に出て剣の修業に励んだ。その時、高田馬場で菅野六郎左衛門の仇討ちをして勇名をはせ、これが縁で赤穂藩堀部家の養子となった。

堀部安兵衛は、元禄十五年（1702）十二月十四日、かの赤穂浪士討入りの四十七士のひとりに名を連ね生涯、二度仇討ちを果たすという数奇な人生を駆け抜けた。会津坂下町貴徳寺には、両親が眠る墓が残っている。